



ま ふう よる 真冬のある夜に

おもおち 重々しいロンドンのスモッグのはるか^{かなた} じょうくう 上空では、凍^いてつくような北風^{きたかぜ}が湿気^{しつ け}をたっぷり含^{ふく}んだ雲^{くも}を打ちたたき、かの美しい結晶^{うつく けっしょう}をはたき出^だしていた。ぼくたちが「雪^{ゆき}」と呼^よんでいるものだ。

きたかぜ あた いちめん ゆき ふ なか まるまる ふと じんぶつ の 北風^{きたかぜ}が辺^{あた}り一面^{いちめん}に雪^{ゆき}を降^ふらせる中^{なか}、丸^{まる}々と太^{まるまる}った人物^{ふと}を乗^{のり}せたそりがや^{じんぶつ}ってきた。そりに乗^{のり}った人物^{じんぶつ}は、甲^{かんたか}高い声^{こえ}でとめどもなく 12 頭^{とう}のトナカイ^{お た}を追^おい立て^たている。トナカイ^{お た}たちは、あたかも冬^{ふゆ}のラップランド^{ラップランド}の平原^{へいげん}を主人^{しゅじん}を乗^{のり}せたそりを引^ひいて走^{はし}るかのよう^{おおぞら}に、大空^{くも}の雲^{あいだ}の間^あをかけぬけていた。

「ホー、ホー、ホー！ ゲホン、ゲホン！」 彼^{かれ}の仲間^{なか}であり、しもべである妖精^{ようせい}のぼくは、息^{いき}がしやすいように背^せ中^{なか}をたたいてや^なった。

「ああ、それでいい。助^{たす}かるよ、ラルフ。」 ゼーゼーいいながら、彼^{かれ}は言^いった。銀河系^{ぎん が}妖精訓練^{けいようせい くんれん}学校^{がっこう}でフィンランド語^{フィンランド語}を専攻^{せんこう}しておいてよかったよ。クローズの言葉^{ことば}はいつ聞^きいても分^わかりづらいが、彼の英語^{えいご}よりは、フィンランド語^{フィンランド語}のほうがまだ分^わかりやすいからね。

「こんな地上^{ちじょう}の体^{からだ}をいつも使^{つか}わんですむことを、神^{かみ}に感謝^{かんしゃ}するわい！」 息^{いき}切れしながら、クローズはうらやましそうにぼくを見^みた。「ラルフ、君^{きみ}はスマートでしなやかで、全^{まった}く妖精^{ようせい}そのものだ！ 君^{きみ}の衣装^{いしやう}は、まるで第^{だい}2の皮膚^{ひ ぶ}のようじゃないか。君^{きみ}はそれについて、どう思^{おも}うかい？」

ぼくは答^{こた}えた。「用途^{ようと}に合^あってよかったです。『衣装^{いしやう}』が小^{ちい}さくて動^{うご}きやすいのは気^きに入^いりました。」

「用途^{ようと}じゃと?! では、わしの格好^{かつこう}はどうなんじゃ？ まるで、秋^{あき}に食^くいだめしたマーモット^{マーモット}が、赤^{あか}インク^{なか}の中^おに落^おちたみたいではないか！ わしや、永^{えい}久^{きゅう}に何^{なん}重^{じゅう}もの救命^{きゅうめい}具^ぐにくくりつけられたような気^き分^{ぶん}じゃ！ ラルフよ、人間^{にんげん}はこんなにも自^じ分^{ぶん}をふくらますことができるのか？」

「残念^{ざんねん}ながら、さようでございます。けれど、今^{いま}わたしたちが向^むかっているのはそこなのでは？」 ぼくはそりから身^みを乗^{のり}り出^だして、下^げ界^{かい}に広^{ひろ}がる地球^{ちきゅう}の表面^{ひょうめん}を見^み下^みろした。眼^{がん}下^かの町^{まち}は、うっすらとしたもやの中^{なか}に星^{ほし}がぎゅう詰^{づつ}めになった大空^{おおぞら}のよう^みに見^みえた。

「ロンドンでございます。」 ぼくは、うやうやしく注意を促した。
クロースはまだ、クリスマスに身に着けることになった、不格好で
ぶよぶよの「衣装」について、ブツブツつぶやいていたからだ。

「ああ、そうだったな。」 目前の仕事を思い出し、彼は大きな巻物
を取り出すと、しかめっ面で目を細くして紙をにらみつけた。結局、
もごもご言いながら、鼻にのっかった眼鏡をはずした。「人間が、
読むためにこんな物を使うとはな！」

彼の白くて太いまゆ毛がゆるんだ。巻物を入念に調べると、
クロースは言った。「あったぞ！ エルシー・ホワイト、カンカーソア通り、
5番地、2階。赤ちゃんの子守りをし、庭の小道の雪かきを毎日2回する
など、父母の手伝いをよくする良い子。父親のためにもっと良いシャツを
縫ってあげられるよう、クリスマスにはミシンがお望み・・・と。おやまあ！
めずらしいもんだ！ なあ、ラルフ？」

「誠に。ガトリング銃だの、短刀だのがほしいなんてリクエストが
どっさりある中で、これは訳がちがいますね。」

「全くじゃ。・・・さあ、着いたぞ。」

ぼくたちは、とあるアパート全体をおおっている、くすんだ灰色の
細長い屋根の上に降り立った。トナカイを静まらせて樋管につないだが、

眼下のうすよごれた通りでは、馬車や馬のひずめの音などは聞こえ
なかった。クロースは煙突の大きさを見て、顔を曇らせている。

「ちょっと手を貸しておくれ、ラルフ。」 ぼくは、クロースが煙突のふちに
たどり着くのを手伝った。

「どうか、人と話す時は、英語で話すことをお忘れなきよう。この
人たちは、一言もフィンランド語が分かりませんから。」 クロースは
うなずくと、うなったり、息を切らしたりしながら、煙突を下り始めた。
ぼくは、静かに後に続いた。

「うわあー！」 突然暖炉の中に現れたぼくたちを見て、住人がさげんだ。
ぼくたちに向けられている、さびた鉄の火かき棒に注意しながら、ぼくは
クロースが立ち上がるのを手伝った。

「一歩でも近付くと、警官を呼ぶぞ！」 ふるえる声で、住人が言った。

クロースはフィンランド語で、自分らは友達だと大声で言ったが、相手は
鉄の火かき棒を引っ込めてはくれず、ぼくの仲間の太った腹に突き付けては
後ろへ飛び下がったりをし始めた。

「英語で話すんですよ！」 ぼくは大声で言った。火かき棒から安全な
距離だけはなれると、クロースは声高に話しかけた。

「今度は何でしょうか？ 自分がやせているので、わしの脂肪が
うらやましいんですかい？ できることなら全部でも差し上げたい
ものですが、床に流してしまっては、もったいないですよ。」

このころまでには、目が暗い部屋に慣れてきて、ぼくたちが押し
入ってきた家の住人がどんな人なのが見えた。その人は中年を過ぎ、
もし一言で言い表すなら、「やせ」だ。手も腕も足も顔も、すべて骨と
皮だけのようで、表情はまるで古い墓石みたいに陰気くさい。人に
接するのに慣れていないらしく、そこへもってクロースがおどろくほど
太っちゃなので、さらに妖精のぼくが加わるなら、一部屋に現れるには
あまりにもおかしいことになってしまう。それでぼくは透明化し、
説明するのは、クロースのたくみな腕前に任せた。クロースには、
知り合ってほんのわずかな時間で人を魅了してしまう人柄があるのだ。

さて、クロースの方と言うと、住人をなだめようと努めている
ところだ。「おどろかせてしまって、誠に申し訳ありません。わたしは
サンタクロースです。このたびは、良き知らせと、クリスマスの喜びを
お伝えるために参りました。」

「サンタクロースだって？ 本物のサンタクロースかい？ 何を、
ばかばかしい！」住人はあざ笑った。

「ばかばかしいですと？ いえいえ、本当です。わたしは、フィンランドから
来ました。ところで、わたしはあなたの暖炉の火をめちゃくちゃにして
しまいました。部屋が凍てつくようですね。すぐに何とかいたしましょう。」
そう言うと、クロースは手をたたいた。すると、暖炉に炎が燃え上がり、
殺風景な部屋が明るくなった。

部屋にあるのは、細長い寝台と、使い古された木の洗面台、それに片隅に
ある木の椅子と大ざっぱに作られたテーブルだけだった。一体どれほど
質素な生活をしてきたのだろうか。明らかに、クロースも同じことを
考えていた。

「これはいけませんね。」クロースは舌打ちして言った。「この椅子はまるで、
骸骨のようです！」

男は冷ややかに言った。「わしの居間にケチつける気なら、さっさと出て
行ってください。そうすれば、わしの家具のことで気を悪くすることもなく
なるし、わしも、おまえさんの姿を見て気を悪くしなくて済みますからな。」

クロースは非常に気を害されたようだった。一言も言えずにいと、男は
しゃべり続けた。

「何て炎なんだ。丸1週間分のたきぎが無駄な熱を生むのに使い
は果たされてしまったではないか。この勢いでいくと、氷河が溶け始めても
おどろ驚かないくらいだ。」

「でも、クリスマスくらいは・・・。」

「何を、ばかばかしい！ メリークリスマスなど、とっととおさらばだ！」

「クリスマスは、家の中にも、外にも、あらゆる所に来ていますよ！
ホー、ホー、ホー、ゲホゲホ・・・」 クロースは陽気に言いながら、
ししま 終いには息がつまってしまった。ぼくは背中をたたいてやった。

「ありがとう、ラルフ。助かるわい。」

「ほね かわ 骨と皮ばかりの男が部屋に立っているのをちらっと見て、ぼくは
さっ すべてを察した。」

「ぼくは男にたずねた。「ぼくはあなたを知っていますよね？ 話し方に
き おお 聞き覚えがあります。あなたはもしかしたら、あのスクルージさんでは
ないですか？」

「ぼくの声が聞こえるようにするためには、また姿を現さなくてはならな
かった。だが、男はこれがすべて、じきに目覚める突飛な夢だと思っ
ているようだ。この時点では、クリスマスの霊がすべて姿を現したとしても、
かれ おどろ 彼を驚かすことはできない。」

「そうさ。わしは、ギャレス・スクルージだ。」 男は、とがったあごを

あ 上げて言った。

「やっぱり！」 思わず、ぼくは声をあげた。クリスマスのように
しんせい ひ けが 神聖な日を汚すようなことを言われて激怒したことを思い出したのだ。
「そうだと思いましたよ！ ケチな匂いは、1マイル先からでも匂って
きますからね。」 ぼくはとなりの赤い大きな人物の方を向いて言った。
「ああ、クロース。ぼく達、エベネーザさんの父側の御従兄弟の煙突を
お 下りてきてしまったようです。やっぱり、ケチは家系みたいですな。」

クロースが言った。「おや、まあまあ。そりや大変だ。そんなとこに
あし ふ い 足を踏み入れてしまったのか。」

「わしをダシにして面白がるのはやめとくれ！」 スクルージが甲高い
こえ い 声で言った。

クロースは、スクルージの言ったことが聞こえなかったかのように
はな つづ 話し続けた。「考えてもみてごらん。暖炉で燃え盛る火も楽しめないほど
ケチなのではな。・・・」

「勝手に人の家にこのこやって来て、侮辱する気か！」 スクルージは、
ろうじん 老人にしてはあまりにもおそろしい顔をしてどなった。

「消え失せろ、赤い巨大怪物もどきめ！ それに、おまえも・・・耳の
とがったお化けめ！」 スクルージは、まるで呪文でも唱えるかのように
うて ふ まわ どなって、腕を振り回した。

それで、ぼくたちは腹が煮えくり返るほど頭にくた。

すると、クロースは大声をおごえをとどろかせた。

「そうなのかい?! では、おまえさんが
クリスマス精神を学ぶまでは、帰らんからな!」

実を言うと、クロースをおこらせると、以前よりも
知り合ったことがある、さまよった幽霊のように
おそろしく、そしてこわい。スクルージはクロースを
前に、ひるんでしまった。するとクロースは
いかりをしずめ、やさしい口調で言った。
「まあまあ、わしは危害を加えるつもりはない。
だが、クリスマス精神は学んだほうがよろしい。」

クロースはスクルージの腕をつかみ、壁を
通りぬけて、雪の降る外へ連れて行った。

「クロース、あわてないでくださいね。
あまり過激なことは・・・。」

クロースは、ただ全身をふるわせてゆかいそうに
笑った。まるで、体全体がゼリーでできている
かのようだ。そして、クロースがスクルージの腕を
つかむと、スクルージまでいっしょにゆさぶられた。
ただスクルージの場合は、吹きさらしにある
今にもこわれそうな柵がゆれているようだった。

クロースがたずねた。「クリスマスは、喜ぶべき
ではないのかね? 最高の贈り物が人間に授け
られたのだぞ。下の人々を見てみよ、スクルージ。」
スクルージは眼下を見てぎょっとした。通りを
せわしく行き来している人たちの多くが、周りに
輝きを解き放つ大きな金色の光を内に秘めて
いたからだ。この輝きの不思議な美しさは、
かたくななスクルージの心にさえ触れた。

「この光は、一体何なんだ?」 スクルージがたずねた。

「これは、永遠の命と愛の光じゃ。これこそ、クリスマスの贈り物じゃ。ほれ、この乞食も、この少女も持っておるが、その金持ちは
持っておらん。なぜか? それは、贈り物だからじゃ。なんだ、おまえさんだって、持っておるのだぞ。」

「わしはそんな物、もらっておらん!」とスクルージ。

クロースは言った。「ああ、人間とは、忘れっぽいものなのう。来なされ。見せて進ぜよう。」

ぼくたちは通りに降りて行っただが、店のショーウィンドウや歩道にあるサンタクロースの絵や模型を見るたびに、クロースは
激しい非難の言葉を発していた。



そしてついにぼくたちは、窓に明かりのともった、ある小さな教会に着いた。中に入って、キリスト誕生の場面を囲んでいる少年少女のために行われているクリスマスの礼拝に耳をかたむけた。

「見てみよ！ これでも、贈り物をもらっていないと言うか？ そこにいるのは、だれだね？」 クロースは、向こうのすみの方で頭をたれて祈っている、非常にやせた少年を指さして言った。

「ぼくは思わずほほえんだ。「スクルージだね。全くもって、神に対しても人に対しても、平和そのものだ。」

「ほら、見てみよ。」とクロース。

祈りが終わると、部屋は一人一人の子どもたちから発散される光で満ちた。それはまるで、花が開き、部屋のすみずみにまでその輝きを解き放つようだった。

スクルージはそれを見て一瞬の間、表情が和らいだように見えたが・・・ほんの一瞬だけだった。スクルージは身ぶるいをする、弱々しい声で「ばかばかしい！」と言った。そして、自分から関心をそらすかのように、クロースの方に向き直って言った。「これは一体どういうことなんだ？ この教会は、何年も前に取りこわされたぞ。そのくらい、知っておる！」

「その通りです。」と、ぼくは答えた（銀河系妖精訓練学校の1年目に、スクルージ家についてのリサーチをしていたので）。「知っているはずですがとも。10年前、あなたがここにアパートを建てるために、教会は取りこわされたのですから。あんな悲惨なあばら家は、今までに見たこともありませんよ。」

スクルージは居心地悪そうだったが、つんとして言った。「そんなの、お前の知ったことか。」

「ぼくが言い返しそうになると、クロースが止めた。「静かに、ラルフ。」クロースがそう言うときは、ぼくはいつも従うことにしている。

子どもたちが立ち上がり、クリスマスツリーの周りに集まって、プレゼントをもらい始めた。その後は、列を成して教会を出、家へ帰って行った。光は今でも一人一人の周りで輝き、それが白い雪とみすばらしい路地を明るく照らしている。



最後の子どもが教会を出ると、クロースはまたもやスクレージの腕をつかんだ。「来なされ。クリスマスの喜びを、もっと見せて進ぜよう。」それからぼくたちは空に舞い上がり、屋根や通りをこえて、ちょうど朝の8時の鐘を鳴らしているビッグベンのてっぺんに来た。するとそこには、やせた老人が立っていた。茶色と灰色の服を着て、ぼくたちがそばに降りてくると、こちらを見上げてあいさつした。二人のあいさつは、何とも風変わりだった。もし新聞雑誌記者が聞いていたら、ちょっとした名演説になったことだろう。

ビッグベンの頂上で、太った老人とやせ細った老人によって交わされたあいさつは、こうだ。

「やあ、クロース。」

「やあ、こちらこそ、クロース。」

「何とも良いお日和で。」

「ごもっとも。最高の日じゃな。」

スクレージとぼくはそばをただよっていたが、ぼくはやせた老人を指さしながらスクレージの方にかがんで言った。「あちらはクロースさんです。」スクレージはげげんな顔をした。「本物ですよ。元々の、最初のクロースです。今までに体重が70キロをこえたことはないでしょうけどね。」二人のクロースの会話は続いた。

「今日は、なかなか貫禄がありますな。」

「太りましたでしょう。」

「ふむ、人間が広告やら何やらでサンタクロースのイメージをどんどんふくらませておるとするのは、残念なことじゃのう。あと2、3年もすれば、煙突の中に入ろうなんてことは論外になるやもしれませんな。」

「やあ、ラルフ。そちらの方は?」

「クリスマスの喜びを必要としている人です。」ぼくは答えた。

やせた方のクロースが言った。「そのようすな。わしにできることなら、何なりと。」

太ったクロースははずかしそうな様子で、巻物を掲げた。

「実を言うと、クリスマスの喜びのリストをどこかで置きちがえてしまったようで。ここにあるのは、ショッピングモールのサンタクロースの欲しい物リストでな。吹き鉄砲、派手な人形、怪物の模型などなど。唯一のまともなリクエストと言ったら、両親のために服を縫ってあげたいのでミシンがほしいという少女のものだけじゃ。」

すると、やせたクロースが言った。「では、わしのリストを持って行きなされ。たとえ何があろうと、クリスマスの喜びは、広めねばならぬからな。ミシンを欲しがっている少女も、そこに付け加えておいてくだされ。」

何^{なん}度^ども礼^{れい}を言^いうと、太^{ふと}ったクロー^ろスはや^あせたクロー^ろスから新^{あたら}しい
リス^うトを受^とけ取^とって、ぼく^ちた^ちは超^{ちよう}高^{こう}速^{そく}でスク^るレ^ージ^じの^あパ^ート^とへ
向^むか^かった。

屋^や根^ねの上^うに降^おり立^たつと、ぼく^ははトナ^とカ^かイをそ^ににつな^なげ^た。

クロー^ろスがスク^るレ^ージ^じをぼく^ちた^ちの^{あい}だ^だの^おこ^こに押^おし込^こむと、ぼく^はは陽^{よう}気^きな
合^{あい}図^ずの口^{くち}笛^{ふえ}を吹^ふいた。

「一^{ひと}つ目^め。煙^{えん}突^{とつ}掃^{そう}除^じの少^{しょう}年^{ねん}に、クマ^{くま}のぬい^{ぬい}ぐるみ^{ぐるみ}じゃ！」

クロー^ろスがそ^うさ^さけ^けぶと、ぼく^ちた^ちは一^{いっ}瞬^{しゆん}の^{あい}だ^だの^{ちい}や^やに
来^きて^いた。クロー^ろスはスク^るレ^ージ^じの^うで^でをつか^ちむと、^う宙^{ちゆう}に浮^ういたま^まま
ショ^しーウ^うィン^{いん}ド^どウ^うをす^あり^みぬ^なけ^けて、明^ある^い店^{みせ}の中^{なか}へ入^{はい}っ^いて行^いった。

クロー^ろスはず^{なら}ら^らと並^{なら}んだおも^ちち^やの陳^{ちん}列^{れつ}棚^{たな}をど^とん^とど^とん通^{とお}り過^すぎ、
人^{にん}形^{ぎよう}や動^{どう}物^{ぶつ}のぬい^{ぬい}ぐるみ^{ぐるみ}がひ^あしめ^めき合^あっ^たて^たいる^たな^なま^まえ^えでピ^ぴタ^たツと
止^とま^まった。小^こさなクマ^{くま}を^{ちい}ち^ちに^てと^と取^とる^とと、自^じ分^{ぶん}の^ごま^まの^{きん}ポ^ぽケ^けット^とか^から細^こかな^な金^{きん}の
粉^{こな}を出^だし、そ^うれ^えをクマ^{くま}の上^うに^かけ^けた。そ^して^しほ^ほえ^えみ^みな^なが^がら、クマ^{くま}を
棚^{たな}にも^どした。

「さ^はて^てと。こ^ここ^こら^らが、マ^まジ^じック^くの始^{はじ}まり^りじゃ。」 クロー^ろスは
スク^るレ^ージ^じに^い言^いった。

店^{てん}長^{ちよう}が店^{みせ}を閉^しめ^はじ^じめると、スク^るレ^ージ^じは^なに^に何^おが起^おこ^こるのか^かと、
興^{きよう}味^み津^{しん}々^{しん}そ^うに見^み入^いった。店^{てん}長^{ちよう}は^ゆか^か床^とを^しは^はき、シャ^しッター^たを^まえ^え閉^ふめ、
店^{みせ}の中^{なか}を今^{いま}一^{いち}度^ど念^{ねん}入^いり^しら^らと^{れい}に^たな^なま^まえ^えで
店^{みせ}の中^{なか}を今^{いま}一^{いち}度^ど念^{ねん}入^いり^しら^らと^{れい}に^たな^なま^まえ^えで
立^たち止^どま^まった。物^{もの}思^{おも}い^いに^ちふ^ふける^くよ^うに^あご^ごを^こす^すつて^いる^いと、クマ^{くま}が
立^たち止^どま^まった。物^{もの}思^{おも}い^いに^ちふ^ふける^くよ^うに^あご^ごを^こす^すつて^いる^いと、クマ^{くま}が
輝^{かが}き^はじ^じめ、店^{てん}長^{ちよう}に向^むか^かつて小^{ちい}さな^{はな}光^{くわ}の^{てん}きら^{ちよう}め^めきを^はな^な放^{はな}つ^たた。
輝^{かが}き^はじ^じめ、店^{てん}長^{ちよう}に向^むか^かつて小^{ちい}さな^{はな}光^{くわ}の^{てん}きら^{ちよう}め^めきを^はな^な放^{はな}つ^たた。
い^{はい}よ^いい^いよ^い速^はく^はく^はあ^あご^ごを^こす^すると、ほ^ほか^かの^おも^もち^ちや^やが^たく^くさん^{さん}入^{はい}っ^いて^いる^い
袋^{ふくろ}に、そ^いの^いクマ^{くま}を^いサ^さツと^い入^{はい}れて^いし^しま^まった。

クロー^ろスはこ^これ^れで^でよ^りし^しと^あ両^{りよう}手^てを^あこ^こすり^あ合^あわ^あせ^あると、再^ふた^たび^あスク^るレ^ージ^じの
腕^{うで}をつか^さみ、寒^{さむ}い^こ戸^こ外^{がい}に出^でか^いけ^いて^い行^いった^い店^{てん}長^{ちよう}の^あの^お後^ごを^お追^おっ^いた。

店^{てん}長^{ちよう}は、暖^{あた}か^たい^{ひかり}光^{はな}を^{ちい}ち^ちに^きま^きう^{かい}に^いち^ちに^{ぐち}ま^まえ^えと^と止^とま^まった。
店^{てん}長^{ちよう}は、暖^{あた}か^たい^{ひかり}光^{はな}を^{ちい}ち^ちに^きま^きう^{かい}に^いち^ちに^{ぐち}ま^まえ^えと^と止^とま^まった。
「こ^ここ^こも、ク^くリ^りス^すマ^まスの^{ひかり}光^みで^い満^{まん}ち^ちて^いお^いる^いぞ^ぞ！」とクロー^ろスが^い言^いった。

ぼく^ちた^ちは^きま^きう^{かい}に^なか^かに^{はい}入^{はい}り、最^{さい}高^{こう}に^{とう}と^おく^くの^{もの}物^ひが^{あた}人^{ひと}に^あと^と与^あえ^えら^られた
と^とい^いう^い物^{もの}語^ごが^よ読^よま^まれる^よ様^{よう}子^すを^み見^みた。そ^して^し、^おく^くの^{もの}物^ひが^{あた}交^{こう}換^{かん}さ^された。
と^とい^いう^い物^{もの}語^ごが^よ読^よま^まれる^よ様^{よう}子^すを^み見^みた。そ^して^し、^おく^くの^{もの}物^ひが^{あた}交^{こう}換^{かん}さ^された。
高^{こう}価^かな^だもの^なで^はな^なく、意^い味^みの^ここ^ころ^ろの^おく^くの^{もの}物^ひだ。そ^れら^らも、同^{おな}じ^じく^く
ク^くリ^りス^すマ^まスの^{ひかり}光^みに^満ち^ちて^いた。

「メ^めリ^りー^やク^{てん}リ^{ちよう}ス^{しょう}マ^{ねん}ス。」 お^いも^いち^いや^い屋^いの^し店^し長^{かん}が^し少^し年^{ねん}に^い言^いった。そ^の瞬^{しゆん}間^{かん}、
ぼく^ちた^ちは、そ^のが^{えん}が^{とつ}ぼく^{しょう}ち^{ねん}た^ちの^じリ^{しょう}ス^{ねん}ト^{ねん}にある^に煙^{えん}突^{とつ}掃^{そう}除^じの^{しょう}少^{ねん}年^{ねん}だ^とと
わ^{しょう}か^{ねん}った。少^{しょう}年^{ねん}は^お大^お喜^{よろこ}び^うで^とク^くマ^まを受^うけ^と取^とった。

「ありがとうございます！ 神様があなたを祝福してくださいますように！」
少年は声高に言った。すると、部屋の中が輝きを増したようだった。
礼拝の終わりには、少年が最高に尊い贈り物を受け取るための祈りも
された。もう一つの花が、光と喜びに開いたわけだ。

「ぼくたちが再び空中に舞い上がると、クロスが言った。「あの
少年はな。そのクマを自分の物にはせんのだよ。」

「なぜだ？」とスクルージ。

「その少年のことは、わしがよく知っておる。その少年は、クマを
弟にプレゼントするのじゃ。」

スクルージは残念そうだった。「では、なぜ少年にクマを二つ、
あげなかったのだ？」

「与えることで、より大きな祝福をもらえらというのに、その機会を
うばってしまうのかい？ まさか！ 少年の愛と祝福は、思いやりや
親切が表されるたびに、何倍にも何十倍にも増えていくのじゃ。それが、
すばらしいマジックというものじゃないのかい？」

スクルージは、ゆっくりとうなずいた。

時計が深夜の12時を打つと、クロスははっとした。「こりゃ、
大変じゃ！ もうこんな時間とは！」

スクルージもぎょっとしたようだった。「おお！ もう行かなくては
ならないなどとは言わんだろうね！」

「悲しくも、現世における人間とのやりとりにおいては、時間
にばられているのです。」 ぼくが答えて言った。

「だが、リストの残りはどうなるんじゃ？ わしのとなりのアパートに
住んでいる少女は？ ただ、このまま去るわけにはいくまい！ そりゃ、
あんまりじゃ。」

「わしにリストをよこせ！」 そうさけぶと、スクルージはそれを
クロスの手からひったくった。「おまえさんがこのリクエストを
遂行しないなら、わしがするからな。とっとと家に返してくれ！・・・
あ〜いや〜、返してくだされ。」

「よろしい。」 クロスはぼそつと言うと、ぼくにウィンクした。
ぼくたちはまたそりにぎゅう詰めになって、スクルージの家へ一直線だ。
クロスとスクルージが窓から中に入ると、ぼくはトナカイと外で待った。
それがぼくの仕事だからね。中で何が起こっているかは聞こえなかったけど、
年取ったスクルージのアパートの中の明かりはどんどん明るさを
増してきて、クロスがせまい煙突から何とかかんとか出てきたころには、
古い建物は全くもって、暖かさと幸せを解き放っていた。煙突の中からは、
スクルージの声がひびいてきた。「万歳、万歳、万ざ〜い！ みんなみんな、
メリークリスマス！ そして、みんなに良い新年があるように！」

クロスとぼくは、顔を見合わせてほほえんだ。「ミッション完了。
家に帰りましょうか。」

ぼくたちが夜の冬空の中で消えると、ぼくたちの衣装も消え、しまっていた
翼が元通りに広がった。トナカイは喜びおどる天使に姿を変えた。ぼくは
サンタ役に言った。「ねえ、ガブリエル。今回のミッションはちょっと変わって
いたけど、うまくいったね。」

ガブリエルはほほえんだ。「神をほめよ！ このすばらしい時に、天国中が
賛美の歌を歌っている。さあ、ぼくたちもいっしょに賛美の歌を歌おうよ、
ラファエル！」

ということで、ぼくたちは共に讃美歌を歌った。「御神の愛をば」

御使い 聖徒たちよ、神の威光を 歌え 月、星、太陽よ、神を 讃えよ
雪の 降る 高嶺も、花が 咲く 谷も、林も 野原も 砂漠も 海も

神様は 罪のある 者をも 愛し、御子である イエス様を 遣わしてくださいました。
ゆるしの 御恵みや、聖めてくださる 力は、文章にも 言葉にも、言い表しきれません。

—ヘンリー・J・ダイク（1907年）

お
終わり

文と絵：松岡陽子 デザイン：ロイ・エバンス
出版：マイ・ワンダー・スタジオ Copyright © 2019年、ファミリーインターナショナル “A Night in Midwinter”--Japanese
関連の読み物はこちら ⇒ 子供のための物語、クリスマス、おしみなく与えること